

痴呆介護は 私たちの宿題

白井正夫 朝日新聞編集委員

正月早々、年賀状にまじって一通の封書がわが家に届いた。新潟県東頸城郡牧村の明願寺住職、池永文雄さん(62歳)、信子さん(63歳)夫妻からである。あいさつ状に添えて、先代住職だった老父の隆勝さんが昨年11月、86歳で亡くなったことが記されていた。夫妻はここ数年、痴呆症を患った父を「介護現場は火事現場と同じです」といいながら自宅で介護して、看取ったのである。

昨年2月、テレビ東京系列でドキュメンタリー番組「頑固親父のおむつ日記ー雪国の父子僧・痴呆介護の記録」が放映された。

「痴呆は恥ではない。隠すな、抱え込むな」という池永夫妻を密着取材した記録である。亡くなる1年前ほどの老父の実像をさらす映像が、痴呆症の現実を改めて伝えるときに、介護にたずさわる家族の絆を描いて、視聴者に大きな感銘を与えた。放送後、明願寺には電話、ファクシミリ、手紙で約150件の反響があった。

この番組制作のきっかけになったのは、私が朝日新聞に書いた小さなコラムがテレビの番組制作者の目にとまったからだった。

3年前、盲目の女旅芸人瞽女の取材で明願寺を訪ねた時、池永夫妻が家族通信「はらから」を毎月発行して十数年になることを知った。ところが老父の症状が進み、在宅介護に手を取られて毎月の発行が時々抜けるようになった。

家族通信も「おじいちゃんはおむつが離せなくなりました」「年末、おばさんが帰ってくれた時は、久しぶりにゆっくり寝せてもらいました」と介護通信と化していた。痴呆介護の苦労をユーモアたっぷりの文章で発信し続ける夫妻の話をコラムに書いた。

池永夫妻の手紙に、老僧も亡くなったか、と夫妻のご苦労に感慨深いものがあった。そんな思いにひたっていたら新年の新聞が「痴呆介護の専門研究へ」のニュースを伝えた。厚生省が2000年度をめどに「高齢者痴呆介護研究センター」を全国に3か所新設するというのだ。

30年後には 300万人の予測

不明を省みずにいえば、記事を読んで驚いたことが2つある。「痴呆症高齢者の数は2030年には300万人を超す」という予測数の多さである。65歳以上者の10%だ。もう1つは、そんなに大勢いて痴呆介護の現場は火事現場と同じというのに、「国の取り組みは遅いなあ」という印象である。

痴呆症については、1986年に映画監督羽田澄子さんが記録映画『痴呆性老人の世界』を発表するなどいろいろなメディアで伝えられてきた。池永信子さんが昨年秋、西本願寺仏教婦人会機関誌に寄せた「介護の日々から」も痴呆の実情を伝える一文である。そこには痴

呆を患った老父の症状と、介護する家族の日常生活があからさまに書かれている。レポートの内容は目新しいものではないが、引用すると……。

「80歳まで規則正しい生活をしていたのに着替え、洗面ができなくなり、おもらしをする」「通信販売をやたら申し込む」。そして、「母が亡くなって一周忌のころ、おばあちゃんはどこへ行きましか、と尋ねられて、びっくり仰天しました」「ああ、これが老人性痴呆だと納得するまで2年近くたっていました」。

痴呆症の症状は人によって違う。池永さんの老父の場合は、自己存在の喪失、徘徊、幻覚、暴言暴力が現れ、こうした突発的な行動に目が離せなくなったという。家で介護しながら、夫妻はそれらの行動を受け入れてきた。と書くとは簡単だが、寺の仕事をしながら2時間置きのおむつ交換を夫妻が交代であたり、深夜2回、3回と起こされれば体がもたなくなる。

テレビ番組でも、突然家を飛び出し山村を徘徊する父に付き添って歩く夫妻が映しだされた。深夜のおむつの交換も、一番内側の尿とりパット、紙おむつ、その上に紙パンツとパッチにパジャマ。「この五段ガードを飛び越えてシーツ、毛布、布団に水撒きをしてくれます」。時にユーモアをまじえた文雄さんの話にも、家族介護の限界も見え隠れしている。法事が続く時は特養ホームや老人保健施設のショートステイを利用した。だが、檀家からの葬式の知らせは突然届く。そんな時も利用したいが、施設利用は何日か前に予約が必要とかで、思うようにはいかない。

そんなに苦労しても夫妻が寺で在宅介護を続けたのは、父への愛である。「ボケても念仏、お経が聞こえてくれば自分で唱える。こんな時間が一日に30分でも続く限り、そういう時間は増やしてやりたい。父の光の当たる時間ではないかと思っている」。文雄さんの言葉である。

池永さん夫妻の苦労は他人事ではなく、明日とは言わず、今日のわが身でもある。

わが国の痴呆性高齢者の数は1990年

に99万人、1995年には123万人を数え、2000年には150万人に達する。しかも国立精神・神経センターによれば、2010年に225万人に増えると推計され、その10年後ごとに270万人、300万人になる数字がはじき出されている。2030年には高齢者の10人に1人が発症することになる。

■ 痴呆介護の研究 ■ 3センター設置へ

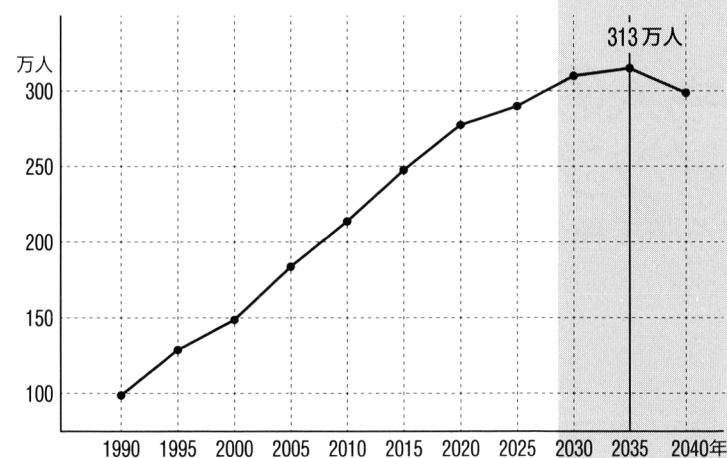
痴呆性高齢者問題が21世紀最大の課題といわれながら、痴呆のメカニズムや治療など医学的な研究は進んでいるが、介護の実務面での研究や臨床研究は少なかったという。このため厚生省は高齢者介護研究センターを全国に3か所つくり(東京都、愛知県、仙台市が候補地)、有効な介護手法の研究をすすめることにした。研究センターには特養ホーム、少人数が暮らすグループホーム、日帰り利用のデイサービスセンター、短期間入所のショートステイなど的高齢者福祉施設を併設する。それぞれに応じた実践的な痴呆介護を研究するためだ。

痴呆介護の有効な方法はまだ確立されていないから、介護現場では放任主義から何らかのリハビリまでさまざまな試み、対応がとられている。その中で軽い痴呆症者介護の切り札といわれるグループホームがある。

自宅で家族からいろいろ世話されて暮らすより、専門スタッフも加わった家庭的な環境で高齢者同士が少人数で暮らした方が痴呆の進行が遅くなるというのだ。痴呆になった人にも尊厳をもって接し、それぞれに家事などの役割を分担して日常生活をする影響が良い結果につながるとみられ、「グループホームケア」という言葉も生まれている。

スウェーデンで1985年、バルプロ・ベック・フリス医師が始めたグループホームは、痴呆症の改善に効果を示して評判になった。わが国でも「紬の家」(青森県八戸市)、「もみの木の家」(秋田市)、「宅老所よりあい」(福岡市)など民間の先駆的な活動が切り開いて、注目されてきた。1997年度から国のモデル事業として補助対象事業になり、全国

図 痴呆性老人数の将来推計



(国立精神・神経センター精神保健研究所)

に約300か所に増えた。一定の条件があれば介護保険の給付対象にもなることが決まっており、ますます各地に広まりそうだ。福祉整備の遅れから大規模施設づくりなど「量的なもの」に精を出してきたわが国も、ようやくを「質的なもの」に目を向けるようになった。

研究センターは、これまで介護現場の経験に頼ってきた痴呆介護の方法を実践的に研究するとともに、介護技術のレベルアップを図る。グループホームでも、生活環境が痴呆高齢者にどう影響しているのか、さらにどう介護すればいいのか、なども研究対象にしていく考えだ。

■ 取り組み各地で ■ 奈良で音楽療法士

厚生省がようやく体系的な研究に乗り出すほどだから、痴呆介護は手探り状態だ。福祉施設でも高齢者の機能刺激リハビリに音楽、演劇、化粧、ゲーム、体操からお絵かき、ペットまでいろいろな試みがなされている。それが話題となって新聞でも時折、報道されることがまた取り組みの遅さを示している。

例えば、音楽を聴いたり、歌ったりして心や体の健康を図る音楽療法を福祉現場に取り入れた、奈良市の実例報告がある。同市では専門の養成コースを修了した奈良市音楽療法士を市社協職員に採用している。特養ホームで「母

さんの歌」「たきび」など懐かしい歌を歌ったり、お手玉遊びをしたりするうちに、初めは無言だったお年寄りが次第に表情が明るくなり、積極性が増したという。

高知市の特養ホームでは、入所者のお年寄りが職員に口紅をひいてもらうなど化粧療法に積極的だ。「鏡をみることで、まず自分を意識する。人の視線も意識して、刺激と活力になる。痴呆の方には、人格を取り戻す手助けにもなります」と、施設長の話が紹介されていた。

お年寄りの間でベストテン入りしている歌と踊りに「痴呆予防音頭」がある。静岡県吉田町の集会所で、その光景を見たことがある。元気な十数人が集まって体操とダンスを楽しんだ後の寄り合いの締めが音頭「呆けてたまるか」だった。使い古したテープを回して、みんなが輪になって無心で踊っていた。集会所の古畳もきしまない軽さに、お年寄りの祈りにも似た気持ちが伝わってきた。聞けば、老人クラブの旅行もテープ持参で、ホテルの宴会場ですぐ音頭になるという。

ダンスの先生役の言葉が忘れられない。「なりたくてなるのではないんです。だから悲しい。呆れたくないは、みんなの願いです」。でも、それは否応なくやってくるから、切ない。痴呆介護研究の取り組みは、私たちに課せられた宿題でもある。